

デ・スタイル (1917~1931)

De Stijl : 「様式」を意味するオランダ語

■ファン・ドゥースブルフを中心に、雑誌『De Stijl』を1917~1932年まで発行

新造形主義の特徴である三原色、平面、直角、垂直線、水平線などによる新しい形象を時代の精神として作り出そうとした運動

1918年 「デ・スタイル第一宣言」

■雑誌「デ・スタイル」第二号に掲載された八項目からなる宣言

→個人と宇宙との新しい平衡と、伝統の束縛や個人の崇拜からの解放を求めている

→普遍的なもの、ユートピア的なものへの情景

デ・スタイル第一期 1917~1921年

・ファン・ドゥースブルフ(Theo van Doesburg)1888-1931

■雑誌『デ・スタイル』を刊行、デ・スタイル運動の旗手であり、運動の中心人物

■1920年代初頭、バウハウスと交流を持ち、多大な影響を与える。

■1920年代半ば、エレメンタリズムを導入し、モンドリアンと対立する

【作品】：『乳牛』(1916~) 一連の抽象化過程を示す連作絵画

『カウンター・コンポジション V』(1924)

『反一構成』(1924)

・ファン・デル・レック(Bart van der Leek)1876-1958

■デ・スタイルの旗揚げに加入していた芸術家の一人

■ファン・ドゥースブルフの1916年の絵画『乳牛』やモンドリアンに影響

■実存に基づく抽象絵画制作をおこなった。

→モンドリアンはよりユートピア的

【作品】：『The Cat』(1914)

・ピート・モンドリアン(Piet Mondrian) 1872-1944

■1914年、パリからオランダへ帰国後以降、水平方向、垂直方向に直線を断続させて後期立体主義風の構成による絵画を制作

■キュビズムに影響された後、カンディンスキーと並び抽象絵画の最初期を築き、

■平行と垂直の線、赤・青・黄の3原色を用いた<composition>へとたどり着く

【作品】：初期の作品としては、「海と埠頭」シリーズが有名

『花咲くリンゴの樹』(1912)

『ブロードウェイブリック』(1942-1943)

・ヘリット・リートフェルト(Gerrit Thomas Rietveld) 1888-1964

■1915年まで建築家 P・J・クラールハーメルの下で過ごした

■黒い枠組みと組み合わせられた3原色を用いて、新造形主義の美学を三次元へ投影する最初の試み
→この黒色と原色との組み合わせは、灰色と白色を加えてデ・スタイル運動の標準的色彩計画となった

1924年 《シュレーダー・シュレーダー邸》

・19世紀後期に建てられた家並みの端に建てられたもの

形態：「要素的で、経済的かつ機能的であり、非記念的で力動的であり、反立体的」

色彩：「半装飾的」

・上階の居住階は「変幻自在」の平面で、煉瓦と木を使った伝統的工法による構造であるにも拘らず、耐力壁や開口部などの不便や制約に煩わされることなく、力動的建築を描いたもの

【作品】：『レッド/ブルー・チェア』(1917) 後に赤・青・黄を塗る

デ・スタイル第二期 1921~1925年

■1921年にはデ・スタイルメンバーは根底から変わった

国内のメンバーの離反から、海外へバウハウスにも強い影響

◎新しいメンバー： ファン・エーステレン (オランダ)

エル・リシツキー (ロシア)

ハンス・リヒター (ドイツ)

デ・スタイル第三期 1925~1931年

■ファン・ドゥースブルフの絵画の中に斜線が導入されたことを巡ってモンドリアンとの間に劇的な亀裂が生じたことから始まる

■リシツキーと結託してからドゥースブルフは普遍的調和というデ・スタイルの理想に対してなお抱いていたはずの関心をことごとく無視して、社会構造や技術を、形態の最も重要な決定要素と見なすようになっていた

【作品】：ファン・ドゥースブルフ『反一構成』(1924)

- 1924 年 「集団的建設をめざして」 論文 ファン・エーステレンと共著
普遍性は表面的に規定される文化を生み出すだけで、その文化は、日常的物体に対する反感によって、芸術と生活の一体化というデ・スタイル当初の関心に逆らうことにしかならないというジレンマを解決

- 1928 年 《カフェ・オーベッテ》(ドゥースブルフ、ハンス・アルブラ)
18 世紀に建てられた建物の中にあり、二つの大きなラウンジと付属空間
巨大な斜めのレリーフ、すなわち反-構成の直線が室内表面を斜めに走って、空間に特色を与え、空間を歪ませた

- リートフェルトは 1925 年以降殆どドゥースブルフと提携関係を結ばなかったが、それにも拘らず彼の作品は同じような方向に発展した《シュレーダー邸》の要素主義や初期の直線的家具から離れ、技量を発揮して、さらに客観的解決へ
→椅子の背板や座板を曲面に
こうした形状は遥かに快適であるばかりでなく、より構造的強度があるというのが理由
普遍的な形態に対する衝動ではなく、技法によって決定される

- <カフェ・オーベッテ>が最後の新造形主義建築として完成した以降、デ・スタイルに与していた芸術家たちは新即物主義運動の影響下へ

- 1929 年 《自邸》 ドゥースブルフ
フランスの大量生産式標準的のサツンを選択して使用
家具はスチール製チューブによる「即物的」椅子を、自己流に調整した

- 1930 年 「具体芸術宣言」
普遍的秩序に対する自意識過剰な関心の健在

- 1931 年 ドゥースブルフの死とともに新造形主義の推進力は失われた

DE STIJL Chronology

	デ・スタイル（オランダ）	オランダ国外	
		<input type="checkbox"/> ヘルマン・ムテジウスのイギリス派遣（1896～1903年） →ドイツ帰国後、ドイツ工作連盟を設立（1907年）	
		<input type="checkbox"/> アドルフ・ロース「装飾と犯罪」（1907年）→装飾の批判 <input type="checkbox"/> シカゴ派の建築	
～1910	<ul style="list-style-type: none"> ■アムステルダム派の建築がはじまる（～1923年くらいまで） 		
-1913	<ul style="list-style-type: none"> ■モンドリアン、パリでキュビズムの実験を始める（1911年） ■ドゥースブルフ、美術批評を開始（1912年） 		
-1914	<ul style="list-style-type: none"> ■モンドリアン、オランダに帰国 ■モンドリアン、「海と埠頭」シリーズ製作開始 	<input type="checkbox"/> 第一次世界大戦勃発 <input type="checkbox"/> マリネッティ「未来主義建築宣言」→サンテリアの未来派建築が有名に	
-1915	<ul style="list-style-type: none"> ■神秘思想がモンドリアンの新造形主義に影響を与える ■ドゥースブルフ、モンドリアンに会い、グループ設立の意思を固める ■M・H・スフーンマーケルス「世界の新しい映像」 		
-1916	<ul style="list-style-type: none"> ■ファン・デル・レック、ドゥースブルフとフサールに出会う ■ファン・ドゥースブルフ「乳牛」制作 ■ロベルト・ファン・ト・ホフによるユトレヒト郊外のヴィラ 		
-1917	<ul style="list-style-type: none"> ■雑誌『デ・スタイル』創刊 ■ファン・デル・レック、グループを去る ■リートフェルト、ユトレヒトに家具工房を設立 ■モンドリアン「白地の上の着色面のコンポジション」 ■ヘリット・リートフェルト「レッド&ブルー・チェア」 		
-1918	<ul style="list-style-type: none"> ■リートフェルトがファン・ホフ、ドゥースブルフ、その他のデ・スタイルのメンバーと出会う ■J・J・アウト、ロッテルダムの都市建築家に任命される ■「デ・スタイル第一宣言」 		
-1919	<ul style="list-style-type: none"> ■モンドリアン、パリに移住。カンディンスキー、リシツキーらと出会う ■ファン・ヘルロー「塊（マッス）の相互関係」彫刻作品制作 	<input type="checkbox"/> 第一次世界大戦終結 <input type="checkbox"/> 「ヴァイマル国立バウハウス」（校長：グロピウス）	
-1920	<ul style="list-style-type: none"> ■ドゥースブルフ、デ・スタイルの理念を広めるため、ヨーロッパを旅行し、ダダのハンス・リヒターらと交流 ■ドゥースブルフ、IKボンセの名でダダの詩を書き始める ■モンドリアン、『新造形主義』を執筆 		

<p>- 1921</p> <p>- 1922</p> <p>- 1923</p> <p>- 1924</p> <p>- 1925</p> <p>- 1926</p> <p>- 1927</p> <p>- 1928</p> <p>- 1929</p> <p>- 1930</p> <p>- 1931</p> <p>- 1932</p> <p>-1933</p>	<p>■ドゥースブルフ、ワイマールのバウハウスを訪問/ デ・ステイルの講義をバウハウスとは別に行う</p> <p>■構成主義の中心人物エル・リツキーがドゥースブルフと出会い、デ・ステイルとの連携を始める</p> <p>■アウト、ドゥースブルフと建築上の色彩問題が元で意見が対立、デ・ステイルを去る</p> <p>■ドゥースブルフ、ワイマールで構成主義者とダダイストの国際会議を主催</p> <p>■エーステレン、ワイマールでのデ・ステイル講義に出席、ドゥースブルフと出会う</p> <p>■パリのギャラリー、レフォル・モデルヌでデ・ステイル建築展が開かれる</p> <p>■ドゥースブルフ、パリに移住</p> <p>■ベルリン展の展示室デザインをフサールとリートフェルトが手がける</p> <p>■ワイマールでのバウハウス展に、リートフェルトがアウト、ウィルスらと参加</p> <p>■ドゥースブルフ、『エレメンタリズム』を提唱</p> <p>■リートフェルトのシュレーダー邸完成</p> <p>■ ファン・ドゥースブルフ「反-構成」</p> <p>■「集团的建設をめざして」 論文ドゥースブルフとファン・エーステレンの共著</p> <p>■モンドリアン、ドゥースブルフの『エレメンタリズム』に反対してデ・ステイルを離れる</p> <p>■パリで国際装飾万博が催されるがデ・ステイルは参加拒否される</p> <p>■ドゥースブルフ、レストランカフェ『オーベッド』の改装</p> <p>■アウト、シュトゥットガルトのヴァイセンホーフ・ジードルンク展に参加</p> <p>■ドゥースブルフ、パリのムードンに自邸を設計、モンドリアンの親交再会</p> <p>■ ファン・ドゥースブルフ《カフェ・オーベッテ》</p> <p>■デ・ステイルの多くのメンバーを吸収してパリで『抽象=創造』グループ結成</p> <p>■《自邸》 ドゥースブルフ</p> <p>■アウト、ロッテルダム郊外の集合住宅「キーフーク」を完成</p> <p>■ ドゥースブルフ「具体芸術宣言」</p> <p>■モンドリアン、『抽象=創造』に参加</p> <p>■ドゥースブルフ、スイスのダヴォスにて死去</p> <p>■ドゥースブルフに捧げられた最後の『デ・ステイル』誌がネリー夫人によって刊行</p>	<p>□バウハウス展（リートフェルトの椅子などデ・ステイルの作品が展覧される）</p> <p>□「デッサウ市立バウハウス」（校長：グロピウス）</p> <p>□「デッサウ市立バウハウス」（校長：マイヤー）</p> <p>□ラ・サラにてCIAM（近代建築国際会議）が結成</p> <p>□フランクフルトにてCIAM第2回総会</p> <p>□「デッサウ市立バウハウス」（校長：ミース）</p> <p>□ブリュッセルにてCIAM第3回総会</p> <p>□「ベルリン私立バウハウス」（校長：ミース）</p> <p>□ナチス政権の搜索を受けバウハウス閉校</p> <p>□CIAM 第4回総会（『アテネ憲章』）</p>	
--	---	--	--